

中1ギャップ解消プログラム

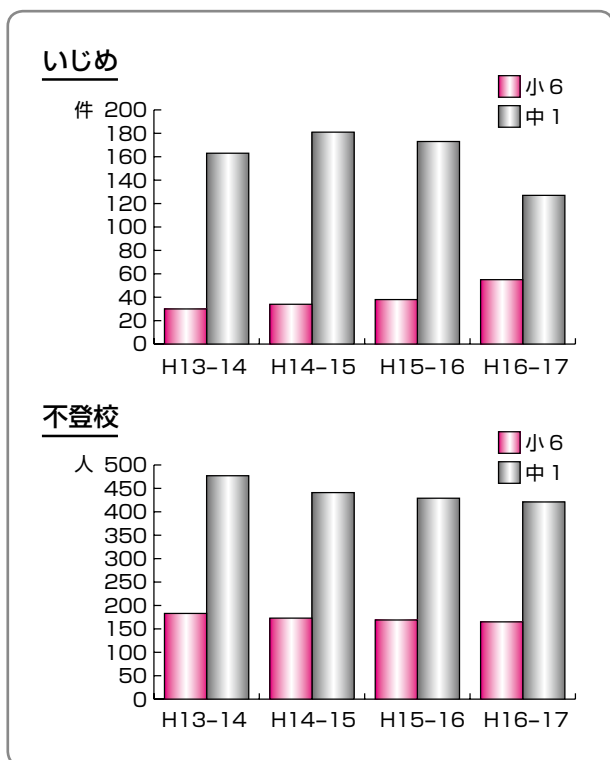
～中1ギャップの解消に向けて～

新潟県教育庁義務教育課

1 中1ギャップ解消プログラムが目指すもの

中1ギャップには、中学1年生でいじめや不登校が急増するという現象面のギャップ（図1）と、中学に進学した子どもたちが感じる小・中学校間の学校制度や教職員の指導等のギャップという2つのとらえ方がある。

図1 中1ギャップの発生状況
対象：新潟県内の公立小・中学校



新潟県教育委員会では、小・中学校間の円滑な接続に着目して、平成15年度から4年間にわたって、中1ギャップ解消に向けて研究事業に取り組んだ。研究事業においては、中1ギャップの要因を明らかにするとともに、6中学校区の中学校と小学校を実践研究校として指定し、その要因から示された対応策について実践的に検証した。実践研究校からの報告を、専門家を交えた中1ギャップ解消検討会議（委員長：神村栄一新潟大学教育人間科学部准教授）で分析・整理し、中1ギャップ解消のための具体的な取組のポイント等を「中1ギャップ解消プログラム」としてまとめた。

「中1ギャップ解消プログラム」は、次ページ図3に示すように、『思春期の繊細な内面へのきめ細かな対応』、『人間関係づくりの能力の育成』、『小・中学校間の緊密な連携体制の確立』の3つの視点から、現行の小・中学校制度の中で、円滑な接続のために何ができるかを実践研究した成果に基づき、具体的な取組を示したものである。また、それらの取組を各校の実態に合わせて年間指導計画の中に取り入れていくためのポイントも示した。

県内の小・中学校では、このプログラムで示された3つの視点から自校の取組を見直し、小・中学校で連携しながら中1ギャップ解消の自校プランを作成して、取組を推進している。

実践研究校の取組による中1ギャップの解消状況は以下のとおりである。（図2）

図2 実践研究校における中1ギャップの解消状況

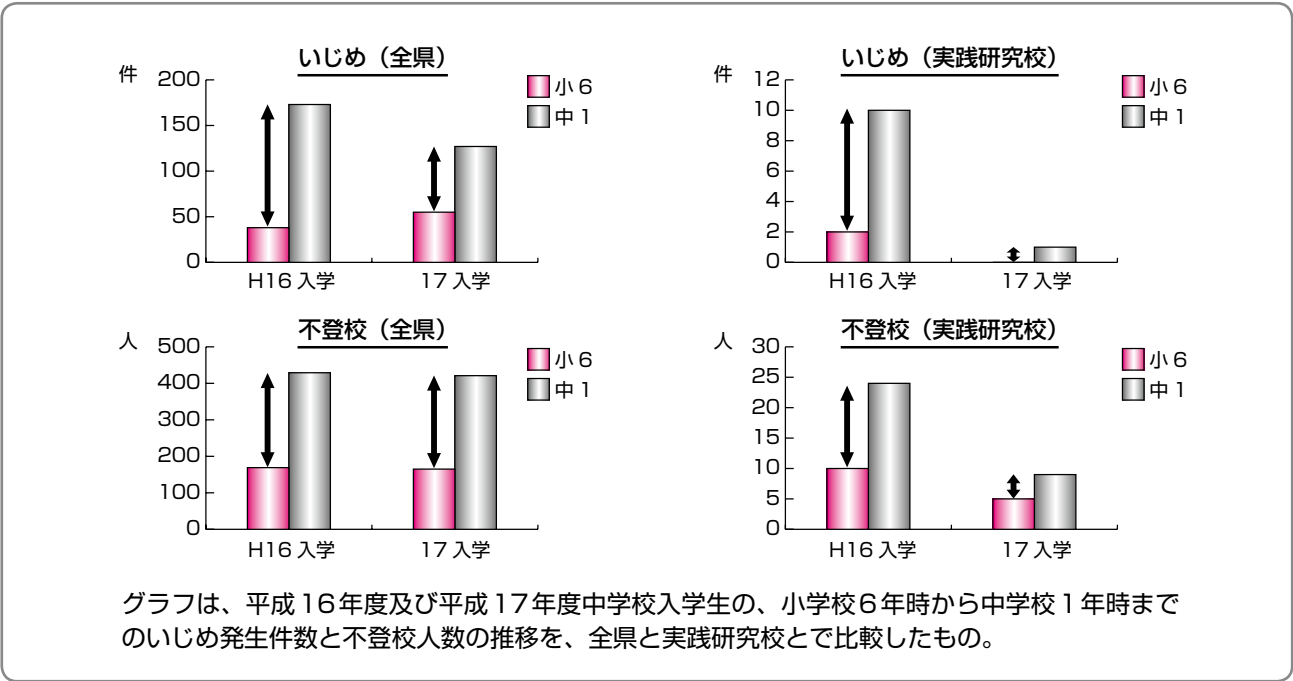
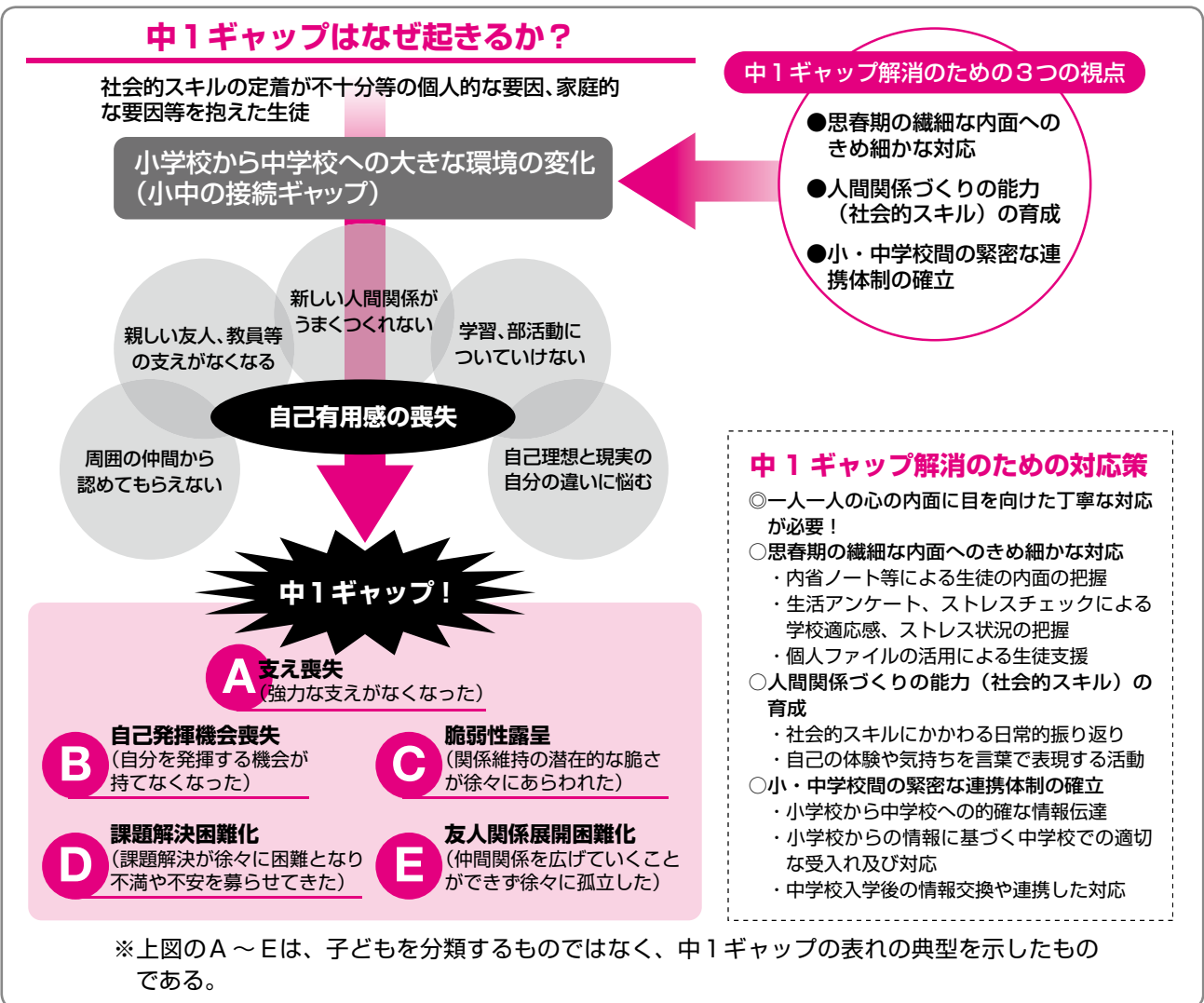


図3 中1ギャップ解消のための3つの視点と対応策



2

中1ギャップを生まないための取組 I

～思春期の繊細な内面へのきめ細かな対応～

多くの中学1年生は、不安やストレスを抱えている。また、それらを乗り越えるために、教職員の支援を必要としている生徒も多い。そこで、中学校では生徒の不安や悩み、心の揺れなど、不適応の兆候を早期にかつ丁寧にとらえて支えていけるように、校内の相談指導体制を工夫していく必要がある。(図4)

1 複数の目でとらえ、対応するための情報集積とその活用のシステムづくり

情報の共有は、全教職員が同一歩調で生徒に対応するための基本になる。特に教科担任制の中学校では、学校生活の様々な場面で生徒とのかかわる教職員が異なるため、それぞれの教職員が得た情報や指導・助言の記録等を共有できるように個人ファイルを作成し、更新していくことが重要である。個人ファイルの作成及び活用では、次の点を明確にして取り組む必要がある。

- ・どのような目的で情報を集積するか。どのように活用するか。
- ・どのような情報を、どのように記載し、どのような形で集積するか。
- ・ファイルの管理責任者、管理方法等、セキュリティは万全か。

また、生徒の不安などの心の揺れに早期に対応するために、中学1年生において複数担任制に取り組んでいる学校もある。複数担任制を効果的に機能さ

せるためには、役割を分担して半分ずつ学級を見るということではなく、複数の視点で生徒を多面的に見ていくという姿勢が極めて重要である。複数担任制によって生徒一人一人を丁寧に見ることができ、困った時にいつでも相談に応じることができるという安心感を生徒にもたせることができる。

2 不適応の兆候を早期発見するためのアンケートの活用

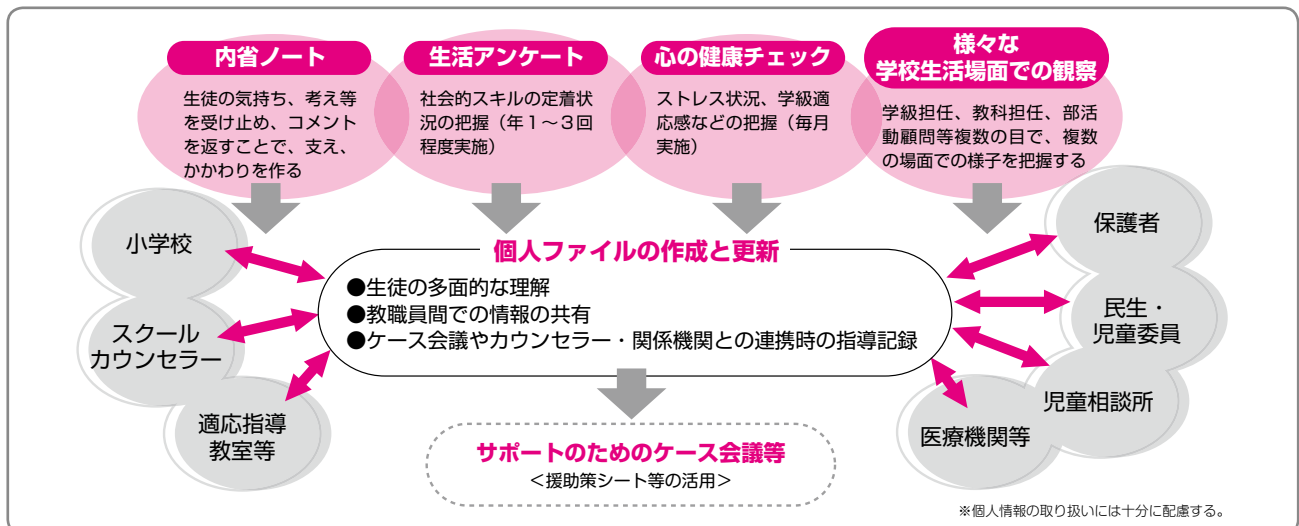
アンケート等による内面の把握は、絶対的なものではない。しかしながら、日ごろの観察等を補足するものとして、高い効果がある。たとえば、心配な生徒に声をかけたり、教育相談をしたり、教科担任や部活動顧問等の他の教職員から目をかけてもらうなどの対応につなげることができる。図4に示したアンケートは、小学校においてもいじめの発見や児童理解の点で効果がある。

3 生徒の心の揺れをきめ細かにとらえ、寄り添うための内省ノート等の工夫

内省ノートとは、生徒自身が毎日の出来事やその日に感じたことなどを書き綴るノートである。

ノートに書かれてある記述からは、観察だけでは把握しにくい生徒の心の揺れや不安・悩みなどが読み取れ、不適応の早期発見につなげることができる。また、教職員が丁寧にコメントを返すことで、不安を抱えた子どもたちの心の支えとなった事例も多く報告されている。

図4 複数の視点によるきめ細かな生徒の見とり



3

中1ギャップを生まないための取組Ⅱ

～人間関係づくりの能力の育成～

中学校への進学に伴い、友人関係や教職員等の支えの状況が大きく変化する中で、人間関係を新たに構築し、維持していく能力を高めることは、中1ギャップを未然に防ぐために重要である。

子どもたちを取り巻く環境の変化により、自立のために必要な人間関係づくりの能力（社会的スキル）の獲得が難しくなっている現状の中で、小学校から中学校までの9か年を見通して、人間関係づくりの能力の育成に計画的に取り組む必要がある。

<社会的スキル育成の基本的な考え方>

- 子どもたちの社会的スキルの定着状況を的確に評価し、目標（獲得させたいスキル）を明確にする。
- スキルトレーニングの場と普段の活動の場（日常活動・行事等）を関連付け、活動をとおしてスキルが定着するように進める。
- 具体的な生活場面の中でスキルを発揮したことで活動がうまくいった、その場の雰囲気がよくなったという成果や効果を実感させる。（自己有用感の獲得）

取組例 1 モデル提示によるソーシャルスキルトレーニング

状況：小グループでの話し合い。順番に意見を聞こうとしている。みんなから話をしてもらいたいのに、中には順番を守らず勝手に周りと話をしだす児童がいる。リーダーの役割は・・・

良い例



今は君の話す番じゃないよ。
もう少し待っていてね！！
(笑顔+やさしい説明)

悪い例



例1 うるさいな、
勝手なことしないでよ！
(怒りあるいは攻撃・中傷)



例2 え～っう～ん・・・
(何も言えず苦しみ、泣く、
落ち込む)

取組のポイント

- ① 望ましくないスキルと望ましいスキル及びその結果を対比させる。
- ② 教職員等が演じて見せることで、より注目させる。
- ③ 発見学習として子どもの気付き、感想の交換などを大切にする。

取組例 2 自己有用感の獲得を目指したピア・サポートプログラム

ピア・サポートプログラムは人の役に立つ体験をとおして、子ども全員の自己有用感を育てるプログラムである。



6年生がお世話する活動：「1年生に遊びを伝えよう」から

取組のポイント

- ① 年間を見通した計画を立てる。
- ② 身に付けさせたいスキルを明示する。
- ③ 教職員の構えや役割を明示する。



学校全体でプログラムの活用

4 中1ギャップを生まないための取組Ⅲ

～小・中学校間の緊密な連携体制の確立～

中1ギャップの解消を図るためには、小・中学校間の緊密な連携が不可欠である(図5)。一人一人の子どもたちについて、小学校での様子及び指導や対応を把握した上で、中学校での指導や対応を検討することや、定期的に中学校区単位で情報交換の場をもつことが必要である。

1 中学校区単位での中1ギャップ解消検討会議の設置

中学校区単位で「中1ギャップ解消検討会議」を設置することは、小・中学校が連携して中1ギャップ解消を推進するための要となる。この会議は、新たに組織せずとも従来からある「いじめ対策委員会」等の組織と連動する形で設置することもできる。この解消検討会議では、主に次の3点について協議する。

- 個人ファイル、小中連携シート等の情報連携システムの確立
- 交流活動、出前授業、合同活動等の企画
- 中1ギャップ解消のための自校プランの作成

2 継続的に子どもを見ていくための引継資料(小中連携シート等)の工夫

9か年をとおして継続的に子どもを見ていくためには、小・中学校で共通の視点を設定し、小学校時の指導や対応について中学校へ引き継いで中学校での指導に生かせるようにすることが重要である。中学校では引き継がれた情報を基に受入体制を整えるとともに、一人一人の状況に応じてきめ細かく対応していく必要がある。

＜小中連携シートを効果的に活用するために＞

- 小中連携シートの目的を小・中学校の教職員で共有する。
- 小・中学校の教職員で情報交換の場を、中学校入学前から入学後に継続して設定し、複数の視点から子どもを見ていく。
- 連携シートを含む中1ギャップ解消のための取組について、保護者に説明する。

＜中1ギャップ解消検討会議の年間計画の一例＞

中学入学前の8月から入学後の6月まで継続的に会議を位置付けて、子どもに関する情報交換を行う。

8月	第3回検討会議 ＜前半＞○中1ギャップ解消に向けた合同研修会 【参加者：小中教諭・養護教諭 講師：スクールカウンセラー】 ＜後半＞○小学6年生の情報交換と実態把握 【参加者：中1ギャップ担当教諭】 ＊小学6年の個人ファイルを活用
12月	第4回検討会議 ＜前半＞○小学6年生の授業参観 (授業・休み時間・終学活等を参観し、児童の姿を見た後で情報交換を行う) 【参加者：中1ギャップ担当教諭、小学6年担任、中学校教諭・養護教諭】 ＜後半＞○小学6年生の情報交換と実態把握 ○3学期の小中連携事業(TT授業・出前授業・中学校説明会等)にかかわる取組の打合せ 【参加者：中1ギャップ担当教諭】 ＊小学6年の個人ファイルを活用
3月	第5回検討会議 ○小学校での様子を説明 ○3学期の小中連携事業における児童のアンケート結果や中学校職員の観密から、不適応が心配される児童に対して質問 【参加者：小学6年担任・小学特別支援担当教諭・中学1年担当が予定される職員(複数名)中学特殊担当職員・小中の養護教諭】 ＊学級編成資料・個人ファイル・小中連携支援シートを活用
4月	第1回検討会議 ○年間計画の作成 ○小中の連携事業の大綱の協議 【参加者：中1ギャップ担当職員】
6月	第2回検討会議 ＜前半＞○中学1年生の授業参観 (昼休み・5時間目の授業・終学活を参観し、生徒の姿を見た後で情報交換を行う) 【参加者：旧小学6年担任・中学1年担任・中1ギャップ担当職員・中学養護教諭】 ＜後半＞○中学校の学習指導についての協議 ○不適応が心配される生徒についての情報交換 ＊不適応が心配される生徒を事前に抽出し、小中それぞれ資料を準備する。(中1個人ファイル・生活アンケート結果等を活用)

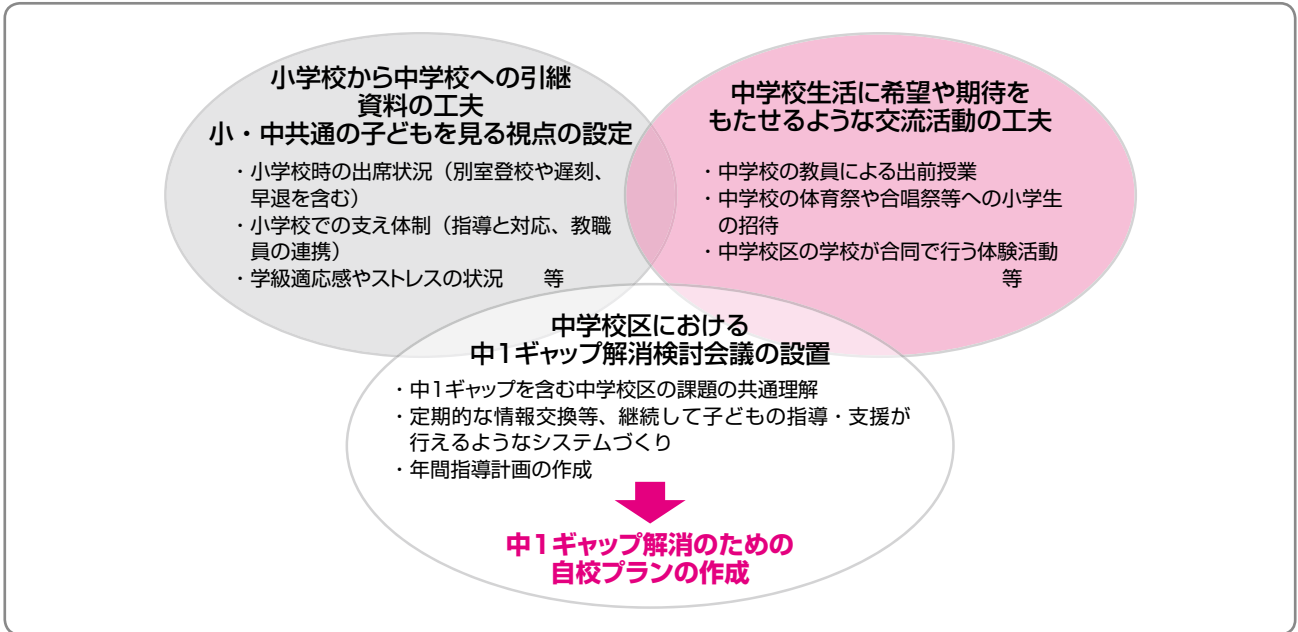
3 小学校から中学校への環境の変化への適応を図る交流活動の工夫

小学校と中学校では、教科担任制、部活動、定期テストや行事への取組等、環境が大きく変化する。このような変化に対応し、中学校生活に抵抗なく入っていきえるようにするためには、小学生が中学校生活の一部分を事前に体験したり、中学生になることを楽しみに感じるような意識付けができる交流活動等を工夫することが重要である。交流活動をとおして、「中学生はすばらしい」、「自分もあんなふうにやってみたい」という中学生活に対する希望を小学生にもたせることができる。



中学校の教員が小学校で授業をする「出前授業」から“先輩の歌声に感動”

図5 小中連携のポイント



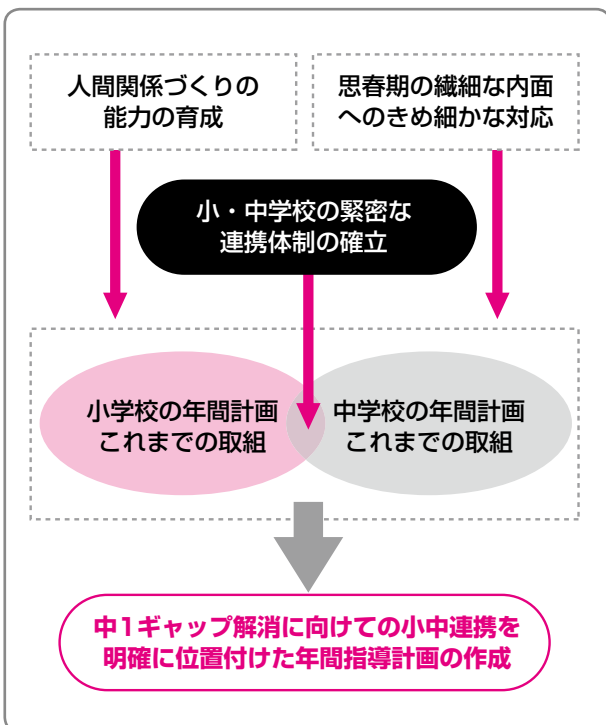
5 中1ギャップ解消に向けた自校プランの作成

中1ギャップ解消に向けた自校プランの作成とは、各学校のこれまでの取組を2ページの図3に示した3つの視点から見直し、中学校区の小・中学校が連携して中1ギャップの解消に取り組むための年間計画をまとめることである。

また、自校プランの作成や取組においては、次に示すピース・メソッド*を基軸として進めることが有効である。

※新潟県教育委員会「いじめ防止学習プログラム」参照

図6 自校プランの作成に向けて



<中1ギャップ解消に向けたピース・メソッド>

P Preparation (準備)

中心スタッフによる中1ギャップ状況の分析と児童生徒の実態把握

E Education (教育)

小中合同教職員研修会等、中1ギャップに関する話合いの場の設定

A Action (行動)

3つの視点を明確に位置付けた自校プランの作成

C Coping (対処)

ねらいを明確にした各取組の実践とねらいの達成状況の確認

E Evaluation (評価)

以下の観点による成果の評価

- ・不適応の早期発見
- ・ストレス状況や孤立感等の改善
- ・社会的スキルの定着状況の向上

中1ギャップ解消に向けた自校プランの例

	小学校での取組	中学校での取組
	日常的な取組として <ul style="list-style-type: none"> ◎内省ノート、生活アンケート、日頃の観察等による児童生徒の実態把握（個人ファイルの作成） ◎交換授業、出前授業等の小中連携による学習指導の工夫 → 小中合同での指導案検討や授業後の振り返りの実施 ◎学校行事等での交流活動、合同での奉仕活動等の実施 	
11月	社会的スキル等の実態調査実施	
12月	○集計・分析 → 個人ファイルへ記入 ※スキル補強の振り返り活動	※出前授業、中学校説明会、1日体験入学等の小学6年生が中学校生活への見通し、安心感がもてるような取組
1月	中学校への期待アンケート	
2月	○小中連携シートの作成 ○出席状況の整理	
3月	小中引継ぎ（管理職、小中生徒指導主事、小6学年部、中新1学年部職員等を含む） → 進学児童の現状把握、中学校での受入体制の確認	
4月	○小6学年部による適応事前指導等（自信や意欲の醸成、保護者との連携を含む） ※お世話する活動等による人間関係づくりの実践	○中1学年会での情報交換会及び中学校適応指導計画の立案（管理職、生徒指導主事、不登校対応等を含む） 職員研修等で全職員で現状認識、組織や対応等を共有化 ↓ <生徒指導部会、学年会等> 職員会議等での目標、活動案の検討
5月	中学校との情報交換	
6月	※運動会に向けた人間関係づくり	○「学校評価」に「中1ギャップ解消」を位置付ける ※生活アンケート、内省ノート、観察等による生徒の実態把握と生徒の状況に応じた対応
7月	小中合同の連絡協議会 → 小学校個人ファイルへの質問、中学での様子の報告、心配な生徒や事例に対する合同での協議	
8月	社会的スキルの育成、発達障害、小中連携学習指導等の合同研修、1学期の生徒の様子に基づく合同事例検討会等 小中での中1ギャップに関する中間の学校評価についての情報交換	
9～11月	※地域における異年齢交流活動	※小中連携での授業や行事の実施、小中の交流活動等

自校プラン作成のための留意点

1 中学校区の課題の明確化

中1ギャップ解消に向けた課題を明確にするためには、地域の児童生徒の実態や中1ギャップの状況等を、中学校区の全教職員で十分に把握することが重要である。そのうえで中学校区の児童生徒に身に付けさせたい力や育てたい姿を明確にして、全教職員の共通理解のもと、プランを作成する。そのためには、各学校の中心スタッフ（管理職及び生徒指導担当等）から構成される中1ギャップ解消検討会議運営委員会の継続的な設定及び中学校区の教職員合同研修会等の設定が必要である。

2 小・中学校での共通の取組の明確化

9か年を継続して子どもを見守り、育てていくという視点から、小・中学校での共通の取組をプランの中に取り入れる。例えば、社会的スキルの定着状況やストレス状況の把握のためのアンケートを継続して行うことにより、小学校から中学校へと環境が変化したことによる子どもの変化をよりの確にとらえることができる。

3 児童生徒の交流・合同活動の位置付け

小学生が中学校生活に対して安心感や期待感をも

てるようにしていく。また、例えば、中学校1年生が小学校の児童と縦割り班で地域清掃を行う等、中学校1年生にリーダー的な役割を果たせるようにすることで、自己有用感を高める取組も効果的である。



小中合同活動「花いっぱいプロジェクト」

（この写真は児童生徒のプライバシーに配慮して一部を加工してあります）

4 教職員の交流・合同研修の位置付け

児童生徒の交流・合同活動に加え、小・中の教職員が9か年を見通して子どもを育てていくという意識をもち、教職員同士の信頼を深めていく活動を位置付けることも重要である。情報交換会や授業参観、合同研修会、出前授業等の取組は有効である。

中1ギャップ対策を「守りから攻めの教育に向けて」の合い言葉として

4年間の研究の大きな成果は、中学校区という地域連携の強化である。とりわけ、小・中学校の連携体制を整えることによって、中学校におけるきめ細かな生徒理解、小学校における社会的スキルの獲得という点で成果を確認することができた。今後の中1ギャップ解消の取組は、小・中学校の教職員だけでなく、地域を巻き込んだ小中の交流・連携・スキル教育へと発展させることにあるだろう。

中1ギャップ解消検討会議委員長 新潟大学教育人間科学部准教授 神村栄一

1 実践研究校の声

● 教職員の丁寧な対応が ● 生徒の心に響いた！

● いつも明るくあいさつを返してくれるA子。副任が教室に行き、いつものようにあいさつするが返事がなく暗い。担任に報告。担任は内省ノートに「今日は何だか元気がないみたいだけど・・・」とメッセージを送ったところ、登下校の友達から外されて落ち込んでいる、という返事が返ってきた。小さな変化を見逃さない教師の目、担任と副任の緊密な連携、すばやい対応で、A子にまた明るいあいさつが戻ってきた。

● 中学校の熱い思いが ● 地域を変えた！

● 中学校区の中に複数の小学校があるB中学校。中学校がリード役になって中1ギャップの現状を小学校に伝え、小・中学校間、小学校間で連携して子どもを育てていくことを訴えた。熱い思いに小学校が応え、地域の中に小中連携の意識が生まれた。

● 学年職員が同じ方向を ● 目指して取り組んだ！

● どんな小さなことでも、学級で起こったできごとや気になることを学年内で共有して、教職員が同じ方向を目指して、役割分担をしながら問題の解決にあたった。学年内の連携体制が確立して、生徒がそして学校が変わった。

2 おわりに

中1ギャップ解消に向けた自校プランの作成は、一から新しい取組を考えることではない。これまでの取組についてその目的や内容、位置付けについて小中連携の視点から見直し、義務教育9か年を通してのきめ細かな指導體制を確立するためのものである。本プログラムに示された取組を参考に、各学校における中1ギャップ解消に向けた取組を一層推進して、いじめや不登校を生まない魅力ある学校づくりが行われることを願っている。

「中1ギャップ解消プログラム」に関する問合せ先

新潟県教育庁義務教育課
いじめ等対策・人権教育班
TEL: 025-285-5511
(内線3867)
FAX: 025-285-8087
<冊子の販売>
文書館
〒950-2001
新潟市西区浦山3-1-28
TEL: 025-267-1028

1冊 500円

